

ヨナ書1章「わがままな者を追いかける神」

1:1 アミタイの子ヨナに次のような【主】のことばがあった。

1:2 「立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ。」

1:3 しかしヨナは、【主】の御顔を避けてタルシシュへのがれようとし、立って、ヨッパに下った。彼は、タルシシュ行きの船を見つけ、船賃を払ってそれに乗り、【主】の御顔を避けて、みなといっしょにタルシシュへ行こうとした。

1:4 さて、【主】は大風を海に吹きつけられた。それで海に激しい暴風が起こり、船は難破しそうになった。

1:5 水夫たちは恐れ、彼らはそれぞれ、自分の神に向かって叫び、船を軽くしようと船の積荷を海に投げ捨てた。しかし、ヨナは船底に降りて行って横になり、ぐっすり寝込んでいた。

1:6 船長が近づいて来て彼に言った。「いったいどうしたのか。寝込んだりして。起きて、あなたの神にお願いしなさい。あるいは、神が私たちに心を留めてくださって、私たちは滅びないですむかもしれない。」

1:7 みなは互いに言った。「さあ、くじを引いて、だれのせいで、このわざわいが私たちに降りかかったかを知ろう。」彼らがかくじを引くと、そのくじはヨナに当たった。

1:8 そこで彼らはヨナに言った。「だれのせいで、このわざわいが私たちに降りかかったのか、告げてくれ。あなたの仕事は何か。あなたはどこから来たのか。あなたの国はどこか。いったいどこの民か。」

1:9 ヨナは彼らに言った。「私はヘブル人です。私は海と陸を造られた天の神、【主】を恐れています。」

1:10 それで人々は非常に恐れて、彼に言った。「何でそんなことをしたのか。」人々は、彼が【主】の御顔を避けてのがれようとしていることを知っていた。ヨナが先に、これを彼らに告げていたからである。

1:11 彼らはヨナに言った。「海が静まるために、私たちはあなたをどうしたらいいのか。」海がますます荒れてきたからである。

1:12 ヨナは彼らに言った。「私を捕らえて、海に投げ込みなさい。そうすれば、海はあなたのために静かになるでしょう。わかっています。この激しい暴風は、私のためにあなたがたを襲ったのです。」

1:13 その人たちは船を陸に戻そうとこいだがだめだった。海がますます、彼らに向かって荒れたからである。

1:14 そこで彼らは【主】に願って言った。「ああ、【主】よ。どうか、この男のいのちのために、私たちを滅ぼさないでください。罪のない者の血を私たちに報いないでください。【主】よ。あなたはみこころにかなったことをなさるからです。」

1:15 こうして、彼らはヨナをかかえて海に投げ込んだ。すると、海は激しい怒りをやめて静かになった。

1:16 人々は非常に【主】を恐れ、【主】にいけにえをささげ、誓願を立てた。

1:17 【主】は大きな魚を備えて、ヨナをのみこませた。ヨナは三日三晩、魚の腹の中にいた。

はじめに

私の米国の友人には、4歳の息子がいます。とてもかわいくておもしろい子ですが、もちろんたいへんな時もあります。小さな子どもたちと関わったことのある人ならおわかりでしょう。大人が「こうしなさい」と言うと、そのまったく正反対のことをするのです。自分の部屋に行って寝る用意をしなさいと言うと、お菓子を探しにキッチンへ行ったりします。そして、自分が悪いとわかっているのに、隠れたりします。私は子どものころ、ベッドの下やソファの後ろによく隠れました。「そんなことをしなさいとは言っていないでしょ！」と突っ込みたくなるのですが、よくよく考えてみると、私たち自身の内にも、そういう反抗的な部分があることに気づきます。そのよい例がヨナです。ヨナは、じたばたして引きずっていかれてやっと、神からの召しに応えました。神がニネベの町に行くようにと命じられるや否や、ヨナは旅立ち、正反対の方向に向かってできるだけ遠くへ逃げようとしてました。彼は、聖書に登場する中で一番反抗的でわがままな預言者です。けれどもこの個所には、なぜ私たちが神を避け、神に逆らってしまうのかについて多く語られています。何千年も前に書かれた書ですが、私たち人間の心がヨナと同じ問題に悩まされていることがわかるでしょう。そして、このなじみ深い話から、なぜ追われることが必要なのか、神がどのように私たちに追い求めてくださるのかについて学びましょう。さらに、イエス・キリストにあって神が私たちに究極的に追い求めてくださることについても、少しわかると思います。

ヨナ書の冒頭から、なぜ追われることが必要なかが示されています。ここからわかるのは、神に対して間違った態度を取り、神を避けようとするため、必然的に追われることになるのです。

## I. 追われることの必要性 (1-3節)

### a. 間違った態度：

- i. 神に命じられたとき、ヨナはどう反応したでしょう。「何をしてほしいですって?」「どこに行けですって?」なぜ彼はこのような反応をしたのでしょうか。
  1. ニネベは、アッシリヤの首都でした。アッシリヤは当時、非情で暴力的な国として知られていました。古代のテロリスト国家と言えます。神がヨナにニネベに行けと命じられたのは、今の状況に置き換えるなら、神が今日私たちに「平壤に行って、さばきがくだることを警告しなさい」と言われるのと同じです。衝撃的なことです。
  2. もっと奇妙なのは、神がヨナを選ばれたことです。列王記第二 14:25 で、ヨナはイスラエルの境界線における侵略を支援していました。ヨナは国粋主義者ですから、ヨナの神観では、神も国粋主義的なお方です。ここからわかるのは、私たちには心の奥に潜む偏見や罪があり、それらが、神が実際にどういうお方であるかをわからなくするということです。ヨナは、特定の神観を信奉していましたが、神がそれをぶち壊されました。するとヨナは怒って、絶望しました。
- ii. この使命に、現実的にも神学的にも納得できないヨナは、応じませんでした。派遣先も派遣目的も合点がいかなかったのも、神に命じられた内容に正当な理由が見当たらないのだから、正当な理由は存在しないのだと考えます。

1. 皆さんにお尋ねします。一番良いことを知っているのは、神でしょうか。私たちでしょうか。ヨナは預言者でした。神のみことばを深く知っており、神から直接語られた人物です。彼が生涯をかけた仕事は、神のみことばを中心とするものです。けれども、ここからわかるのはただ、聖書に慣れ親しんでいても、私たちの心が聖書の神とひとつでない可能性はあるということです。
  - a. 例を挙げると、近頃は個人の選択を尊重しない神というものを受け入れられず、性に関する聖書の教えから逃げる牧師がいます。また、健康や富が得られると教えるために、聖書が語る金銭欲の危険性を無視する人たちがいます。
  - b. もっと個人的な例を挙げるなら、私は今、これまでで一番みことばに親しんでいます。それなのに、自分の生き方がそれほど変えられていないのは恥ずかしいことです。人は神のみことばを読みながら、簡単に神のみことばを見過ごしてしまうのです。
- b. このような神に対する間違った態度から、**神を避けようとする**ようになります。
  - i. 神を知っているという人にとっての問題はたいへい、神に何を求められているかがわからないことではありません。むしろ、私たちがそうしたくないことです。だから、ヨナも神と語り合っ解決しようとはせず、ただ背を向けて逃げました。神に尋ねようとしなかったのです。私たちに足りないのは知識ではなく勇氣です。
  - ii. ヨナ書 1 章のこの個所には、避けるための方法がふたつ記されています。
    1. 「主の御顔を避けて」**逃げる**。  
1 章に「主の御顔を避けて」という表現が何度も繰り返されています。皮肉な話です。聖書は神が遍在だと教えます。つまり、どこにもおられるお方です。ただ、ここで伝えようとしているのは、ヨナがどうしても神と向き合わなければならなくなるような場所や人を避けていたということでしょう。私たちも同じです。何か理由をつけて教会を休んだり、クリスチャンの友だちと会わないようにしたりします。触れられたくない部分に神が立ち入れないよう信仰を実生活と切り離します。神と向き合わず、ただ単に宗教的なことをしている状態になっていませんか。
    2. **沈黙**。  
もうひとつ注目していただきたいのは、1 章後半になるまでヨナが一言も話していないことです。船長が彼に話しかけても、神にも人にも一切言葉を発しません。私たちが神を避けているときは、祈りの生活は枯れ、機会が与えられても周囲の人に福音を伝えなくなります。皆さんの祈りの生活はどうでしょう。この沈黙が、最終的に孤独につながります。ヨナは神から逃げようとして、どんどん孤独の深みに陥っていくのです。

ヨナは宣教師候補としていかがでしょうか。あなたが神の立場ならここでどうしたでしょうか。他のもっと良い、資格もやる気もある人を選びますか。他にも候補者はいくらでもいたでしょう。けれども、神は事業をしようとしておられるのではありません。神が求めておられるのは人の心です。神は、優れた人材に引かれるのではなく、罪深い人を追いかけてくださいます。そし

てここでは、神が嵐を起こしてヨナを追いかけられます。神は、ヨナの罪深い態度をそのまま放置することをよしとされません。ヨナは逃げますが、神は厳しいあわれみをもって、そのすぐ後を追われます。

## II. 追いかける神。(5-10節)

### a. 嵐をとおして。

ヨナ書1章の嵐は、まるで主人公のようです。この場面で起こる出来事の大半が嵐についてです。そこには、神がヨナに大風を吹き付けられたとあります。ここを読み飛ばしてはいけません。神が風を吹き付けられたのです。すべてを破壊する嵐がたくさんある中で、この嵐はヨナにとって、そして水夫たちにとっても、益のために用いられた嵐です。

- i. ここでしっかりお聞きください。困難がすべて自分自身の罪の結果ではありません。一方、すべての困難は、私たちの心を支配する罪の力を弱める助けになり得ます。嵐が起こったことで真実に目が開かれることがあります。嵐が起こらなければ気づかなかったかもしれません。火災報知機が鳴らなければ、火事に気づかないかもしれません。私は米国で中古車を運転していますが、先日、メーターパネルの警告灯が点滅しました。警告灯がつかなければ、メンテナンスが必要だとはわからなかったでしょう。
  1. 皆さんにお尋ねします。あなたにとって、「船」を揺るがすものは何でしょう。「船」が壊れるかもしれないと恐れさせるものは何でしょう。結婚を待ち望んでいるのにずっと独身でいることでしょうか。望んでいた就職がうまくいかなかったことでしょうか。成績不振、それとも、家庭不和でしょうか。
  2. あなたにとっての「嵐」とは何でしょう。もしかすると、あなたはまだその嵐に出くわしていないのかもしれませんが。この嵐は、神が私たちをご自身のもとに呼び戻すためのものですから、安心してください。神が、皆さんの抱える不安や悩みを増しておられるように感じますか。それは、ご自身のもとへあなたを引き寄せようとしておられるのです。手を引いてくださる場合もありますが、首根っこを掴まれるときもあるのです。けれども、常に私たちのためにされることです。神はいつも、私たちの味方です。私たちのために思って、私たちに反対されることさえあります。
  3. 神がどうやってこの真理を私に教えてくださったかお話ししましょう。私は米国で神学校に行けてよかったと思っていますが、外国で暮らすのはなかなかたいへんです。奉仕でも、会話のやりとりや人間関係で難しいことがたくさんあります。そうやってがっかりしたり悩んだりする状況に対する私の反応をとおして、私自身について神から教えられました。完璧主義なところ、権利主張をするところ、神の愛を信頼しきれないところなどです。人生の「嵐」が起こらなければ、気づかなかったことです。人の性質には、そのような嵐によってでなければ表面化しない致命的な欠点というものがあるのです。

### b. 人をとおして。

神は、嵐だけでなく、船に乗っていた異邦人の水夫たちをもとおしてヨナを追いかけられます。船長は、「起きて、あなたの神にお願いしなさい」と言いました。これは、冒頭で神がヨナに命じられた言葉に似ています。神はご自身の預言者を遣わし、異邦人を神のほうに向かせようとなさいましたが、ここでは異邦人が預言者を神のほうに向かせようとしています。

i. 嵐の場面は非常に劇的です。嵐で海が荒れる中、水夫たちは自分たちの神に祈りながら、船を軽くしようと必死になっています。一方ヨナは、船底でぐっすり寝ていました。彼は、悲しみで疲れ果てていました。ヨナはこの水夫たちのことをまったく心にかけていませんでしたが、神は、その水夫たちを遣わして、ヨナを起こし今の状態から抜け出させようとされました。

1. この部分をよく読んでください。水夫たちはみんなを助けようと必死になっていますが、ヨナは我関せずといった感じで、祈ることさえしません。みんな同じ船に乗っているのに、ヨナの個人的な信仰は、周囲の人に何の益ももたらしません。彼は自分自身の信仰の拠り所によって、一緒に船に乗っている人たちの苦しみを乗り越えようとはしません。謙虚に彼らに仕えることも、神との関係を正すよう伝えることもしていません。

2. それでも、水夫の必死の叫びがヨナに届き、ヨナは反応せざるを得ませんでした。残念ながら、世界中の多くのクリスチャンがこのような状態です。身近な人たちと向き合い、思いやりの実践と福音のメッセージで周囲の必要に応えることをせず、ジャコウウシのようにふるまいます。つまり、水を飲む方向ばかりに向いて、内向きで、困窮する世間に背を向け、その叫びを聞こうとしません。

a. 日本でクリスチャンとして生きるのはいへんだということはわかっています。キリスト教は少数派で、教会全体が苦しんでいます。けれども、それが教会を内向きで沈黙する信仰にさせてしまったのでしょうか。大阪インターナショナルチャーチの皆さんにお尋ねします。大阪が求めているもの、必要としているものは何でしょうか。その答えは、私よりも皆さんのほうがよくわかるはずです。里親、路上生活者、うつ、孤独、高齢者ケア、薬物依存、離婚、環境問題、等、何が求められているのでしょうか。大阪で「おぼれそうです。助けてください」という叫びはどこから聞こえてくるのでしょうか。神はこのような手段で、教会を追いかけ、世の救いのために行動を起こすよう駆り立てられます。神は、ニネベ人をはじめ異邦人に預言する召しをヨナに与えられました。神はその召しからヨナを放免なさいません。同じように、神は、地の果てまで福音を携えるという宣教命令を教会に与えられました。その命令を先延ばしにさせてはくさいません。

私たちも神に追いかけていただく必要があることがわかりました。そして、神がわがままな人を追いかける方法もいくつかわかりました。さらに、この話のもっとも有名な部分から、神が罪人を追い求めるためにどれだけのことをなさるかがわかるでしょう。

### III. 究極の追求 (11-16節)

- a. 12節で、ヨナは水夫たちに「私を海に投げ込みなさい」と言います。
  - i. なぜ彼はそう言ったのでしょうか。どこからその発想が出てきたのでしょうか。気落ちして、ニネベに行くくらいなら死んだほうがましだと思ったという可能性もあります。
  - ii. けれども私は、周囲の人のことをヨナが考え始めたからだと思います。ヨナの閉ざされた心が開き始めたのです。彼が言っているのはこういうことです。「私のせいで皆さんが死にかけています。でも、皆さんのために死ぬべきなのは私です。神が怒っておられるのは私のことですから、私を海に投げてください。」
- b. 彼は、どんな働きにも犠牲が必要だということを学んでいます。愛をもって手を差し伸べるよう召された人々のために、自分自身をささげる犠牲です。そのような真実の愛は、どれほどの犠牲を払っても、愛する対象の必要を満たします。人生を変える愛はすべて、身代わりの愛だと、ヨナは学んでいるのです。
  - i. このことに、励まされませんか。わがままなヨナでさえ、周囲の人に手を差し伸べるために神が用いてくださるのです。彼はヨナ書の最初から最後までぶれてばかりの人でした。そんな不完全なヨナでも、船にいる他人のために自分を犠牲にすることができたのです。
  - ii. 私たちも、不完全でぶれやすい人間です。けれども、ヨナにはなかったものが私たちにはあります。ヨナ書に描かれている嵐は、ヨナが逆らったことに対して神が残念だと感じておられることの表れです。その嵐は、ヨナが海に投げ込まれるとやみました。これは、私たちに代わってキリストが一度死んでくださることをあらかじめ示しています。ヨナは、自分の罪のために嵐の海へ投げ込まれましたが、イエスは、私たちの罪のために十字架上で神の御怒りの嵐の中に投げ込まれたのです。皆さん、ヨナの問題は、神が信頼できるお方だと信じていないことです。けれども、私たちの身代わりになって苦しみ、私たちに自由を与えてくださる神は、信じられるはずで、ヨナは神の恵みを信用できませんでした。彼は十字架の御業を知りませんでした。私たちには、どんな言い訳があるのでしょうか。
  - iii. 神がヨナの召しをどのように具現化されたかわかりましたか。神は、よこしまなニネベ人を追い求めるようにとヨナに命じられました。悔い改めて信じなさいという恵みをもって呼びかけなさいと命じられました。ヨナはそれに従わずに逃げました。神は、ニネベ人に対するのと同じ厳しい恵みをもってヨナを追いかけられました。ヨナも、ニネベ人と同じ恵みの呼びかけが必要だったのです。そこに込められた皮肉がわかりますか。けれども、その召しを具現化するために神がどれほどのことをされるかは、物語の登場人物の誰も予期できなかったでしょう。神がご自身を嵐の中に投げ込まれるのです。そして、十字架上で、嵐とご自身の御怒りのさばきに飲み込まれるのです。イエスが「ヨナのしるし」と言われたのはそういうことです。イエスは、おぼれそうなあわれな罪人を

見て、「わたしを嵐の中に投げ込みなさい」と言われました。主は、あなたを追って飛び込まれたのです。

#### まとめ

最後にお伝えします。水夫たちは、神に追われたら、神から身を避ける場所はないと学びました。ヨナもある程度はそのことを学んだでしょう。身を避けることができるのは、神のうちだけです。神から逃れることはできません。神はどこにもおられるお方だからです。けれども、神のもとに逃げることはできます。十字架は、そのことを示す究極の証です。神から逃れようとして安らぎを得ることはできませんが、神のもとへ行くなら、必要な安らぎは与えられます。ヨナはまだそのことを心得ていないようですが、私たちは十字架を見上げ、神を信頼できると確信することができます。私が初めて宣教旅行で日本に来た時のことです。私は不安でした。そして、美しいけれども私にはなじみのない文化の中で少し寂しさを感じていました。そのとき、神が私たちを追い求めてくださることを知り、詩篇 139：7-10 が特別なみことばになりました。

#### 詩篇 139：7-10

139:7 私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう。

139:8 たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。

139:9 私が暁の翼をかって、海の果てに住んでも、

139:10 そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕らえます。

神は私たちのようなわがままな人間を追いかけてくださいます。嵐や海の深みの中まで追いかけてくださいます。そして、イエスというお方によって、死も通ってくださいました。逃げるのは、やめませんか。